学会の社会的および個人的機能

梅　田　倫　弘
（東京農工大学）

このたび日本光学会幹事長を仰せつかりました梅田倫弘です．私も日本光学会に入会して30年以上になりますが，どのような経緯で入会したのか，定かではないほどの年月が経ちました．振り返れば，これまでにもいくつかの学会の経験がありますが，継続している学会は，日本光学会をはじめとして3つの学会のみになっています．

さて，本稿では，なぜ学会は存続し続けるのか，なぜ研究者（ここでは学会に所属する大学および企業関係者をひとまとめとして）は学会に入り続けるのか，を少し考えて見たいと思います．そのためには学会の社会的機能をまず考える必要があります．東京大学の中原淳氏*は，次のようにまとめています．

1）研究者間の繋がり，社会的相互作用の維持
2）研究知見の実務への普及促進
3）ピアレビューを通した論文査読と成果公開

学会の分野によって異なる部分もあるでしょうが，いわゆる科学技術周辺の学会の機能はこれですべて言い表せるでしょう．ただし，3）の論文査読と成果公開については，科学技術研究の国際化が急速に進み，インパクトファクターの怪物が跋扈している現状では，その機能が後退しつつある印象は否めません．

1）から派生する事柄としては，年次講演会，研究会を通した科学技術的知見の交換や情報の獲得，知己を通したさまざまな人的ネットワークの構築が考えられます．その結果，大学人であれば共同研究や大型研究グループへの参画，あるいは将来のプロモーションに繋がることもあるでしょう．企業人であれば，2）の項目にも関連してきますが，共同研究，それに伴って新規事業の展開もあり得ます．このほかにも，学会が取り扱う学問分野の新規開拓や教育普及を通して学会の活動分野を拡大させることで，学会を成長させるとともに国際的な連携を図り，より広い視野で学問を発展させるという機能も見逃すことはできません．

このように，学会サイドから見たときの機能はいろいろ考えられますが，個人レベルの観点から考察することも，学会の存在意義を明確にして学会をより理解する上で大切です．なぜなら，学会の財政基盤は，ひとえに個人会員の会費に依拠しているからです．個人レベルの学会へのサポートがあって初めて学会は存在できているのです．

個人の学会の選択基準は何でしょうか．これは個々人で異なることはいうまでもないのですが，一般論としては，2つに分類できるのではないでしょうか．1つ目は，学会の専門分野と自分の専門性が一致するかそれに近い場合で，継続的な会員となっている場合（ケース1）です．2つ目は，ご自身の業務変更や，研究の進路方向のための情報収集や専門性を高めるために，一時的に会員になるような場合（ケース2）です．もちろん，学会としてはケース2よりもケース1

*http://www.nakahara-lab.net/blog/2011/11/post_1808.html

のほうが好ましいのですが，現実的には両ケースが混在している状況ではないかと思います．しかも退会の自由もあるので，ケース2の場合は，会員の流動性は高く，学会側には知恵を出して会員を惹き付けるアイデアが望まれます．最近では，さまざまな会員サービスを展開している学会も増加傾向にあると聞きます．

一方，会員へのサービスの充実のためには，「学会」という組織を健全に運営する必要がありますが，運営に携わる人もまた会員であり，これは営利企業とは大きく異なる部分です．つまり，ボランティアベースで学会が運営されているということです．会員の方々には，この現状を理解していただいた上で，会員サービスを享受して，自由なご意見をお寄せいただきたいと思います．会員の方々のご理解が得られない場合，小規模の学会では財政問題などが散見されますが，妙案がないのが現状です．望ましいのは，ケース2からケース1へ会員が転向するような学会活動を推進していくことでしょう．例えば，若手会員に学会組織のメンバーになってもらい，人的ネットワークに参加してもらうことです．そのためには財政面でのサポートも必要であり，学会にはそれなりの覚悟が求められます．

いずれにしても，少子高齢化が控えるわが国で，学会活動を維持して発展させていくには，会員の自由な発想に基づく闊達な学会活動を支援する組織作りとともに，会員の相互扶助の精神を醸成できるような“場の設定”が重要です．